HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	福沢諭吉と西周の留学体験 ： わが国の知識人と留学(その一)
著者	安酸，敏眞；YASUKATA，Toshimasa
引用	北海学園大学人文論集(60)：142(一0三) -121(一二四)
発行日	2016-03-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

福沢諭吉と西周の留学体験
――わが国の知識人と留学（その一）――

安酸敏眞

福沢諭吉（一八三五―一九〇一）と西周（一八二九―九七）は、加藤博之（一八三六―一九一六）や津田真道（一八二九―一九〇三）らとともに、幕末から明治初期にかけて、わが国の近代化のために尽力した先覚者・啓蒙家である。この二人はともに明治維新前に江戸幕府から外国に派遣された貴重な経験をもち、傑出した啓蒙思想家として、明治日本の立役者となった点で共通している。

明治期の福沢諭吉

福沢諭吉は、一八三五年（天保五年）一月一〇日――旧暦（太陰暦）一八三四年一二月一二日――、大坂玉江橋北詰の中津藩蔵屋敷に、父百助と母阿順の末子として誕生した。生後一年半にして父が病死したため、母子六人（兄一人、姉三人）で藩地中津に帰る。数えの十四歳ごろから漢学を学び始め、めきめき上達する。一八五四年（安政元年）二月、兄三之助に伴われて長崎に行き、砲術家山本

（一〇三）

物次郎の家に食客として住み込み、蘭学を学び始める。翌一八五五年（安政二年）、大坂の緒方洪庵（一八一〇―六三）の適塾に入門して蘭学修行を継続。二年後には早くも緒方塾の塾長に推される。一八五八年（安政五年）一〇月、藩命により江戸に上がり、築地鉄砲洲所在の藩主奥平家中屋敷に蘭学の家塾を開く。これがのちの慶應義塾の起源である。ここに至るまでの足取りは、六十年の生涯を口述筆記した『福翁自伝』に詳しく記されているが、このとき福沢の蘭学の腕は相当のものになっていた。

江戸に出てきた翌年、すなわち一八五九年（安政六年）のとある日、福沢は開港間もない横浜に見物に行き、店々の看板の横文字もビンの貼紙の文字も一向に理解できず、大きなショックを受ける。

> 横浜から帰って、私は足の疲れではない、実に落胆してしまった。これはこれはどうも仕方がない、今まで数年間の間、死物狂いになってオランダの書を読むことを勉強した、その勉強したものが、今は何にもならない、あすこに行われている言葉、書いてある文字は、英語か仏語に相違ない。ところで今、世界に英語の普通に行われているということはかねて知っている。何でもあれは英語に違いない、今我国は条約を結び開けかかっている、さすればこの後は英語が必要になるに違いない、洋学者として英語を知らなければ迚も何にも通ずることが出来ない、この後は英語を読むより他に仕方がないと、横浜から帰った翌日だ、一度は落胆したが同時にまた新たに志を発して、それから以来は一切万事英語と覚悟を極めて、さてその英語を学ぶということについて如何して宜いか取付端がない。[1]

ときあたかも安政の大獄が幕開けしたばかり。日米修好通商条約（一八五八年）が調印され、同年九月までにオランダ、ロシア、イギリス、フランスなどとも同様の条約が締結され、このいわゆる五ヵ国条約に基づき、江戸に近いとこ

ろとしては、横浜が開港したところであった。福沢は一八五四年（安政元年）にはじめて蘭学に接し、長崎で一年、大坂で足かけ四年、都合丸四年あまりひたすら修業を積んできて、蘭学にはかなりの自負心をもっていた。ところが、そこまで苦労して身につけた蘭学が通用しない現実を突きつけられたのである。福沢の素晴らしいところは、この現実に愕然として落胆したものの、すぐに気を取り直して新しい現実に果敢に対応する努力をしたことである。蘭学から英学へのこの転向を、福沢は他に先駆けて実行した。ここに福沢の頭抜けた進取性が見てとれる。

福沢のたぐい稀な進取性とチャレンジ精神は、一八六〇年（万延元年）の幕府軍艦のアメリカ派遣に、自ら志願してその一行に加えてもらったことにも示されている。軍艦といっても全長たかだか一六三フィート、全幅二八フィートにすぎない三本マストの木造艦で、総積載量は三八〇トン、蒸気機関は備えていてもせいぜい一〇〇馬力で、石炭を焚くのは港の出入り口のみ、あとはただ風を頼りに運転しなければならないものであった。これが有名な咸臨丸である。ペリーの黒船来航からわずか七年そこそこのことであり、オランダ人教師を招いて長崎で海軍の伝習を開始するようになってからまだわずか五年ほどなので、太平洋横断を試みるところまで漕ぎつけたことは、それなりの快挙だったわけである。提督は時の軍艦奉行木村摂津守、これに随従する艦長は勝麟太郎（勝海舟）、その他総勢九十六名の一行。乗組員のなかにはこの航海にかなりの不安を覚えて尻込みする者もいたが、福沢はアメリカを見聞する絶好の機会ととらえて、この一行に加わるように四方八方手を尽くしたのである。

航海に要した日数は三十七日で、万延元年一月一九日（西暦一八六〇年二月一〇日）に浦賀沖を出発して、二月二六日（現地時間の二五日）にサンフランシスコの港に着いた。途中天候が芳しくなく、船は大揺れに揺れ、船に弱い勝麟太郎などは終始自分の部屋に籠っていたが、福沢は「牢屋に這入って毎日毎晩大地震にあっていると思えば宜いじゃないか」[2]とすまし顔だったというから、なかなか大したものである。一行はおおむねサンフランシスコとその周辺に五〇日あまり滞在し、その間に福沢はアメリカにおける西洋文明の実態をわが目で確認する機会をもった。日本人の一行は

（一〇五）

すべてに不慣れで、「例えば馬車を見ても初めてだから実に驚いた。そこに車があって馬が付いて居れば、乗物だということは分かりそうなものだが、一見したばかりでは一寸と考えが付かぬ」[3]有様だった。ホテルに敷き詰めてあった絨毯の大きさや、口をあけると恐ろしい音のするシャンパンという酒にもたまげたという。一事が万事このような次第で、「日本を出るまでは天下独歩、眼中人なし怖い者なしと威張っていた磊落書生」の福沢も、「初めてアメリカに来て花嫁のように小さくなってしまった」[4]という。いろいろな工場も見学させてもらい、科学技術の先進性には目を瞠ったものの、理学上のことについては驚かなかった。だが、社会上のことには皆目見当がつかないほどで、建国の父である初代大統領ワシントンの子孫はどうなっているか尋ねたところ、冷淡な答えしか返って来ず、社会慣習的な面における彼我の違いを感じたそうである。

帰りは同年閏三月一九日にサンフランシスコを出帆し、ハワイに寄港して、五月五日に再び浦和に戻ってきた。船中のエピソードとしては、サンフランシスコの写真屋で撮った一枚の写真――十五、六歳の少女と一緒に写ったもの――を皆の者に見せびらかして、福沢は大得意になった。写真そのものがまだ珍しい時代だったので、誰もが写真は写してきたとしても、異国の白人女性とともに一枚の写真に納まるとは、福沢ならでの進取性の表われ以外の何物でもない。さらに言及すべきことは、福沢がこの初めての外遊の際に、英語の辞書を購入してきたことである。彼は「その時に私と中浜万次郎という人と両人が、ウェブストルの字引を一冊ずつ買ってきた。これが日本にウェブストルという字引の輸入の第一番」[5]であると、後年自慢げに語っている。

若き日の福沢諭吉とアメリカ人少女
（万延元年サンフランシスコにて）

帰朝後、福沢は幕府の外国方（いまでいえば外務省）に雇われて、翻訳の仕事に従事するようになった。この幕府への出仕はおそらく木村摂津守の推挙によるものと考えられる。渡米を陣頭指揮した木村は、福沢の人物を高く買って、その才能を幕府に役立てようとしたのであろう。そのころのわが国には、オランダ語の文書を読む者はいても、他のヨーロッパ言語を読みこなす者はいなかったので、諸外国から幕府によせる公文には、必ずオランダ語の訳文を添えることになっていた。イギリスやアメリカからの文書を訳す際も、不明の箇所は蘭文を参照することができるので、随分都合がよかったそうである。このようにアメリカから戻って来てから、福沢はひたすら英書を読むことに努め、新しい時代に対処するためには是非とも英語が必要であると説き、塾生たちにも蘭書ではなくもっぱら英書について教授するようになった。

一八六二年（文久二年）、渡米から帰ってわずか一年半ののちに、福沢は遣欧使節に随行してヨーロッパ巡遊の旅に参加する機会を得た。前回の渡米は木村摂津守に秘かに懇願して実現したものであったが、今回の渡欧は幕府に雇われていてヨーロッパ行きを命ぜられたのであるから、一切は官費で賄われることになり、福沢には手当てとして四〇〇両もの大金が支給された。福沢は親不孝の罪滅ぼしのために、そのうちの一〇〇両ほどを郷里の母親に送っている。実は、福沢はこのヨーロッパ巡遊の少し前に、芝新銭座に転居し、しかも中津藩藩士土岐太郎八の次女阿銀（一般には、きん）と婚礼を挙げていたが、国許の母親を引き取るには至っていなかったのである。このように、転居と新婚生活の慌ただしいなかで、福沢はおよそ一年間のヨーロッパ旅行へと出かけた。

それからヨーロッパに行くということになって、船の出発したのは文久元年十二月のことであった。[6] このたびの船は日本の使節が行くというために、イギリスから迎船（むかいぶね）のようにして来たオーヂンという軍艦で、その軍艦に乗ってホンコン、シンガポールというようなインド洋の港々に立ち寄り、紅海に這入って、スエズから上陸して蒸気車

（一〇七）

に乗って、エジプトのカイロ府に着いて二晩ばかり泊まり、それから地中海に出て、そこからまた船に乗ってフランスのマルセイユ、そこで蒸気車に乗ってリオンに一泊、パリに着いて滞在およそ二十日、使節のことを終り、パリを去ってイギリスに渡り、イギリスからオランダ、オランダからプロス〔プロシャ〕の都のベルリンに行き、ベルリンからロシアのペートルスボルグ〔サンクト・ペテルブルク〕、そこから再びパリに帰って来て、フランスから船に乗って、ポルトガルに行き、ソレカラ地中海に這入って、元の通りの順路を経て帰って来たその間の年月はおよそ一ヵ年、即ち文久二年一杯、押し詰まってから日本に帰ってきました。[7]

このときの渡欧使節団は、竹内下野守正使、松平石見守副使、京極能登守目付役など、総勢四十名足らずで、このなかには翻訳方として、福沢のほかに松木弘安と箕作秋坪も加わっていた。いずれも着物に大小の刀を横たえての外遊であった。外国では食事が不自由であろうからと、白米を箱に詰めて何百箱も持参し、さらに旅中止宿の用意というので、廊下にともす金行灯、提灯、手燭、ボンボリ、蠟燭等を積み込んでいったというのだから、まるで大名が東海道を通行して宿駅の本陣に止宿するような感覚で渡欧したことがわかる。近代ヨーロッパの現状を知らないのであるから仕方がないが、海外渡航とか異文化圏巡遊ということの意味は、自国の伝統や自文化の常識のみに寄りかかる判断の危うさ、あるいはその滑稽さを身をもって悟ることにある。

……無数のガス灯は室内廊下を照らして日の暮るるを知らず、食堂には山海の珍味を並べて、如何なる西洋嫌いも口腹に攘夷の念はない、みな喜んでこれを味わうから、ここに手持無沙汰なるは日本から背負て来た用意の品物で、ホテルの廊下に金行灯をつけるにも及ばず、ホテルの台所で米の飯をたくことも出来ず、とうとうしまいには米をはじめ諸道具一切の雑物を、接待掛の下役のランベヤという男に進上して、ただ貰って貰うたのも可笑しかった。[8]

福沢ら一行がヨーロッパを訪れた当時は、欧米諸国の横暴な諸政策に憤って日本国内では攘夷論真っ盛りの頃であったが、ヨーロッパに来て現地の新聞などを読んでみると、まっとうな政府批判や正論の主張も許されているので、福沢は「なるほど世界は鬼ばかりではない、これまで外国政府の仕振りを見れば、日本の弱身に付け込み日本人の不文殺伐なるに乗じて無理難題を仕掛けて真実困っていたが、その本国に来て見ればおのずから公明正大、優しき人もあるものだと思って、ますます平生の主義たる開国一偏の説を堅固にした」[9]と述べている。これも海外渡航や留学体験のもたらす有益な知見の一つである。

しかし福沢は、このヨーロッパ巡遊が彼にとっていかに有益だったかを述べつつも、同時に、そこに不可避的に随伴した自己矛盾的な制約性についても、彼一流の皮肉をこめて報告している。

……私がこの前アメリカに行ったときには、カリフォルニヤ地方にまだ鉄道がなかったから、勿論鉄道を見たことがない、けれども今度はスエズに上がって初めて鉄道に乗り、それからヨーロッパ各国を彼方此方と行くにもみな鉄道ばかり、到る所に歓迎せられて、海陸軍の場所をはじめとして、官私の諸工場、銀行会社、寺院、学校、クラブ等は勿論、病院に行けば解剖も見せる、外科手術も見せる、あるいは名ある人の家に晩餐の饗応、舞踏の見物など、誠に親切に案内せられて、かえって招待の多いのにくたびれるというほどの次第であったが、ただここに一つ可笑しいというのは、日本はそのとき丸で鎖国の世の中で、外国に居ながら兎角外国人に会うことを止めようとするのが可笑しい。使節は、竹内、松平、京極の三使節、その中の京極は御目附けという役目で、ソレにはまた相応の属官が幾人も付いている。ソレが一切の同行人を目ツ張子で見ているので、なかなか外国人に会うことが六かしい。[10]

（一〇九）

福沢、箕作、松木の三名は開明的志操の持ち主なので、当然のことながらヨーロッパ先進国の文明事情をつぶさに観察しようとするのであるが、

……何でも有らん限りの物を見ようとばかりしていると、ソレが役人連の目に面白くないとみえ、殊に三人とも陪臣で、しかも洋書を読むからなかなか油断をしない。何か見物に出掛けようとすると、必ず御目附方の下役が付いて行かなければならぬという御定まりで始終付いて回る。此方は固より密売しようではなし、国の秘密を洩らす気遣もないが、妙な役人が付いて来ればだうるさい。うるさいのはマダ宜いが、その下役が何か外に差支があると、私共も出ることが出来ない。ソレは甚だ不自由でした。私はその時に「これはマア何のことはない、日本の鎖国をそのままかついで来て、ヨーロッパ各国を巡回するようなものだ」と言って、三人で笑ったことがあります。[11]

まさに鎖国中の視察旅行なので、これもまた無理からぬことかと思う半面、そこに幕府の役人たちの時代遅れの知的狭隘性が露呈している。

福沢はさらに一八六七年(慶応三年)、三度目の外国行として、再度アメリカを訪れている。これは幕府がさきに軍艦の購入をアメリカに発注し、あらかじめ二隻分ほどの代金は支払っていたのに、一艘が届いただけで、あとは南北戦争が勃発してそのままになっていたのを、何とか話をつけるための渡米であった。福沢はこの渡米にも自ら志願して同行した。交渉は上首尾に運んでストーンウォールという船を買うことに決まり、これが東艦となった。

それはさておき、倹約家の福沢はヨーロッパ渡航の際に支給された渡航費用のうち、母親に送った残りの大部分を、英書の購入に充てた。「これがそもそも日本の輸入の始まりで、英書の自由に使われるようになったというのもこれからのことである」[12]が、二度目のアメリカ渡航の際には、最初の渡米のときよりもさらに多くの金をもらったので、福沢曰

く、「その金をもって今度こそは有らん限りの原書を買ってきました。大小の辞書、地理書、歴史等は勿論、そのほか法律書、経済書、数学書などもそのとき初めて日本に輸入して、塾の何十人という生徒に銘々その版本を持たして立派に修業のできるようにしたのは、実に無上の便利でした」[13]。

このように、わが国の文明開化を主導した先覚者・啓蒙家としての福沢諭吉にとって、三度にわたる洋行はかぎりなく重要な意義を有していた。彼はアメリカでそしてヨーロッパで、新しい文物・技術・制度に触れて、まさに蒙を啓かれる体験をしたのであり、そしてその貴重な体験に照らして、固陋な同時代人たちを相手に啓蒙活動を展開したのである。しかし福沢とはまったく異なる背景と立場から、西周もまた独自の意義深い啓蒙活動を行っているので、われわれはつぎにこの人物について考察してみよう。

西周助（しゅうすけ）ことのちの西周は、一八二九年（文政一二年）二月三日、石見国鹿足（かのあし）郡津和野（現、島根県）に生まれた。津和野は四万三千石の小藩ではあったが、父時義は食禄百石を賜っていた藩医であり藩儒でもあった。周助は森鷗外の大伯父筋にあたり、のちに鷗外に大きな影響を及ぼす。彼は一八四〇年（天保一一年）、数え年十二歳で藩校養老館に入る。一八四八年（嘉永元年）、養老館句読（くとう）（漢文の素読を教える人のこと）を命ぜられる。一九五三年（嘉永六年）六月、アメリカの海軍総督ペリー、大統領フィルモアの国書を携えて浦賀に来航。国中が大騒ぎとなるが、津和野藩も時代の趨勢に乗り遅れないために、優れた藩士を江戸に派遣することを決定。周助はその一人に選ばれて江戸に出て、江戸御留守詰時習堂講釈を命ぜられる。オランダ語を必死で学んだが、やがてより本格的にオランダ語を学ぶために、一八五四年（安政元年）三月下旬、脱藩を決行。すぐに召し捕らえられ、「永の御暇」（永久の解雇処分）を下される。行き場を失った周助に救いの手を差し伸べたのは、江戸本郷元町に又新堂という洋学塾を開いていた手塚律蔵であった。手塚は周防の出身で、塾生には長州藩やその周辺の藩の出身者が多かったが、周助はこの手塚に拾われて彼の塾の講師をする

（一一一）

ようになる。周助の才能を見込んだ手塚は、オランダ語だけでは新しい時代に対応できないと考え、周助をジョン万次郎の英語塾にも通わせた。周助はこの英語塾で榎本武揚と知り合いとなった。

手塚の周助への師弟愛が最もよく発揮されたのは、周助の幕府の蕃書調所（ばんしょしらべしょ）への就職斡旋に関してである。蕃書調所とは、一八五六年（安政三年）、幕府が九段下に創立した洋学の研究機関で、洋学の教授・統制、洋書の翻訳の任に当たった。これは一八六二年（文久二年）、一橋門外に移転して洋書調所と改称し、一八六三年（文久三年）にはさらに開成所と改称されたが、恩師の手塚は弟子の周助がこの研究機関に登用されるよう一方ならず尽力した。彼は津和野藩主亀井茲監（これみ）に掛け合って、周助を復藩の上で幕臣への道を辿れるよう交渉したが、冷たく拒否されるや、今度は周助と義兄弟の契りを結び、元の主家佐倉侯に頼み込んで、佐倉藩士佐波銀次郎の食客に取り立ててもらった。こうして一八五七年（安政四年）五月四日、周助は晴れて「蕃書調所教授手伝並」に任ぜられた。「教授手伝」が現代の呼称で「准教授」に相当するとすれば、「教授手伝並」とはさしずめ「講師」か「助手」というところであろうか。ともあれ、脱藩浪士の身分だった者が「幕臣」となり、「十人扶持」を下されたのであるから、これは稀代の幸運というべきである。ところで、周助の非凡なるところは、「蕃書調所教授手伝並」に採用されて半年も経たぬうちに、のちの第十五代将軍となる一橋慶喜に「蝦夷地開拓建議」を提出していることである。もちろん、慶喜からの返事はなかったが、おそらく彼の記憶に「西周助」の名前が擦り込まれたであろうと推察される。

念願の蕃書調所の教授職に就いた西周助にとって、次なる目標は

オランダ留学時代の西周

幕府からオランダに派遣された留学生たち（前列右端が西周）

実際に外国に渡航して見聞を広めることであった。われわれがすでに見たように、西よりも六歳若い福沢諭吉は、一八六〇年（万延元年）一月、すでに咸臨丸に乗って初の渡米を果たし、さらに一八六二年（文久二年）一月に渡欧使節団の一員として洋行していた。西のなかに先を越された悔しさがあったに違いない。一八六二年（文久二年）、幕府がオランダへの留学生派遣を決めたとき、西は何としてもそれに加わりたいと強く希望して、関係者にさまざまな働きかけをした。石附実によれば、洋書調所（文久二年五月、蕃書調所を改称）の西周助と津田真道の両名は、「かねてから強く洋行の希望をもち、万延、文久の使節派遣のさい、これに参加しようとして再三熱心に当局者にはたらきかけたが容れられず、そのねがいをこの機会に実現させようと、上司の御目付、蕃書調所掛・伊賀守浅野氏祐（のち美作守）、外国奉行・大久保忠寛（越中守、のち一翁）らに迫ってこれをうごかし、ついに老中・安藤にもこれを認めさせてようやく参加の許可をえた」[14]のであった。今回のオランダへの使節派遣は、オランダに発注していた軍艦「開陽丸」の受け取りが主目的であって、外交使節派遣が目的ではなかった。したがって、榎本武揚、沢太郎左衛門、赤松大三郎、田口俊平らの海軍操練所関係者が中心メンバーであって、洋書調所

（一一三）

の西周助と津田真道、あるいは長崎の蘭方医伊東玄伯と林研海らは、いわば付け足しメンバーであった。

西はこの渡欧にあたって、つぎのような希望と抱負を語っている。

「小生頃来西洋の性理之学又経済之学抔の一端を窺候処、実に可驚公平正大の論にて、従来所学漢説とは頗る趣を異にし候所も有之哉と相覚申候。尤彼の耶蘇教抔は、今西洋一般の所奉に有之候へども、毛の生えたる仏法にて、卑陋の極取るべきこと無之と相覚申候。只『フィロソフィア』(Philosophia)之学にて、性命之理を説くは程朱にも軼ぎ、公順自然之道に本づき経済之大本を建てたるは所謂王政にも勝り、合衆国英吉利等之制度文物は彼堯舜官天下之意と周召制典型之心とにも超えたりと相覚申候。実に由斯道而行斯政、国何不富、兵何不強、人民何不聊生、祺福何不可求、学術百技何不尽精微と奉存候。」[15]

ここで「性理之学」といわれているものは、西洋の「フィロソフィー」のことであり、西はのちにこれに「哲学」なる訳語を充てることになるが、[16]西は以前からこの哲学や経済学や政治学に関心を持っていた。そして中国伝来の漢学や儒学と比べてみても、西洋のこうした諸学問に驚くべき正当性を見出していた。西洋人が一般に信じているキリスト教も、東洋の仏教とは異なるが、本質的には仏教の教えと通底するものである。アメリカやイギリスの制度・文物は、東洋的な政治制度の理想を超えたものであって、道義と政治が一体となっている。どうして国が富まず、兵力が強くならず、人民が暮せないことがあろうか。どうして幸福追求や学術技芸全般の発展ができないことがあろうか。西はおおよそこのような西洋観をもってヨーロッパに渡航した。

彼はこのときのオランダ留学の記録を文書にして残しているので、われわれはそこから彼の足取りをかなり詳細に知ることができる。最初に大まかな足取りを掴んでおくと、一八六二年（文久二年）六月一一日、軍艦奉行よりオランダ

留学の命を受ける。渡航費用としては二十五ヶ月分の計算で、合計六六〇両二分というから相当の高額である。[17] 六月一八日、津田真道や榎本武揚らとともに咸臨丸に乗って品川を出帆。浦賀、下田、長崎に至り、長崎からオランダ商船カリップス号に乗り換えて東シナ海へ。ところがこの商船はインドネシアのバンカ島とビリトン島との間の海峡で座礁。やむなく近くの小島に上陸。一行は原住民のイスラム的生活を興味深く観察した。[18] やがて迎えの船が来て、バダビア（現ジャカルタ）に到着。ここでは原住民と華僑との生活環境の相違を観察し、またオランダ人が建てた病院や学校などを見学している。バダビアからはオランダ船テルナーテ号に乗り換え、スンダ海峡を越えてインド洋へ出る。船長はオランダのロッテルダムの人。インド洋からマダガスカル島沖を通り、喜望峰の沖合を回って大西洋へ。大西洋では二月二七日、ナポレオン一世（那勃崙）が幽閉されていたセント・ヘレナ島（聖都厄列那嶋）に上陸。留学生たち十五名はナポレオンの墓に参詣した（但し、遺骸は一八四一年にパリに還葬されていることまで付記されている）。[19] 一八六三年（文久三年）五月、オランダのロッテルダム到着。ハーグを経てライデンに到着し、ブレー街（ストラート）の「ホテル・ド・ハウデン・ゾン」に旅装を解いたのは、六月四日（文久三年四月一八日）のことであった。オランダ到着後のそれぞれの足取りと、とくに津田と西の消息については、津田の孫にあたる津田道治の著作や他の近時の研究に比較的詳しく記されているので、詳細はそれに譲りたい。[20] 日本人留学生たちは、「先ず蘭語に熟達するのが急務であるといふので、共同して教師を雇入れて蘭語の稽古を始めることにし」（赤松大三郎『半生談』）、とくに津田と西は一週六時間オランダ語の授業を受け、約三ヶ月間語学の習得に専念した。西は一〇月二〇日、津田は一一月一七日、フリーメイソンリーのライデン支部「ラ・ベルテュー」に入会した。[21] 両人は一一月三日（火）よりライデン大学教授のフィッセリング（Simon Vissering, 1818–88）[22]から五教科の講義を受け始め、毎週火曜日と金曜日の夜、彼の私宅に通って受講した。講義は一八六五年（慶応元年）一〇月をもって終了した。一二月一日（慶応元年一〇月一四日）、二人はライデンを出発し、まずハーグにいる榎本を訪れ、それから榎本・沢・田口・職方の古川庄八ら四名とともにロッテルダムに赴いた。翌二日、同胞四名に見送られて

（一一五）

ベルギーのブリュッセルに向かった。ブリュッセルまではライデンの書籍商（boekverkooper）ファン・サンテンが同行したようである。津田はライデン滞在中サンテンの店をよく訪れていたので、彼にとって津田は上客だったのであろう。そこから二人はパリに至ったが、パリでは五代才助(友厚)、寺嶋宗則、森有礼らと会い、交誼を結んだ[23]。さらに福地源一郎と交わり、一二月一五日の夜パリを発ち、翌一六日にマルセイユに到着した。そして一二月一九日に「サイド・マルセイユ号」に乗りマルセイユを出帆。スエズ、アデン、ポイント・デ・ガール、シンガポール、サイゴン、香港、上海を経て、横浜到着は一八六六年二月一二日（慶応元年一二月二七日）のことであった[24]。

さて、オランダ留学の中身であるが、西はテルナーテ号船上で学習の抱負と研究計画をオランダ語でしたため、オランダの日本留学生受入れ局に通告している。この書簡はフィッセリング家に残されていたもので、それによれば、幕府もヨーロッパの学術を移入する必要を感じて、江戸に学校を設立し、諸藩より教師を選任して種々の学問を教授させている。けれども、この学校は設備および教授法において、いまなお幾多の不備欠陥を有し、学問も物理学、数学、化学、植物学、地理学、および蘭語、独語、英語、仏語を、ただ読んだり理解したりする状態にとどまっている。自分としては、統計学、法律学、経済学、政治、外交などの分野と、Philosophieを学びたい、時間があればフランス語も学びたい、英語はとっくに学んでいるが、読めても話せないなどと、述べている[25]。

西周と津田真道がフィッセリングからどういう教科を学んだかは、「五科学習に関するフィッセリングの覚書」にその概要が記されている。

シモン・フィッセリング教授

津田真一郎、西周助両君ニ業ヲ授ルニ就テノ書付

余思ハクハ津田真一郎　西周助君ノ来志ト其所望ニ応スルニハ治国学ノ原始ヲ授ルヲ以テ至当トス

　此学ニ属スル学科五

其一　天然ノ本分ナツウールレグト　其二　民人ノ本分フォルケンレグト

其三　邦国ノ法律スタートレグト　其四　経済学スタートホイスホウドキュンデ

其五　経国論スタチスチーキ

二君ニ此五科ノ要旨ヲ識得セシムル為ニハ成丈務テ簡易明白ニ説クベシ

此五科学ハ大約二年ニシテ成業ヲ期スベシ

両君業ニ就ク前ニ先ツ深ク蘭語ヲ習ホ能之ヲ解シ又能ク之ヲ言フ明瞭ニシテ且容易ナルベシ

余此治国ノ学ヲ教フルヲ以テ自任セバ今年第十月或ハ第十一月ヨリ始メナン

最初ニハ大学校ノ休日ヲ除ク外毎週二昼夜ヲ之ニ充ン

然レトモ若余教ヘテ益ナキヲ諭リ或ハ他ノ故アリ之ヲ廃セント欲スル時ハ何月日ニ拘ラズ之ヲ廃セン事自在ナルム

事要ス

二君右ノ業ヲ受ル者ニハ余ガ家ニ来ルベシ

右ノ数件之ヲ是トスヤ或ハ更ニ他ノ是ニ加ヘント欲ス箇条アリヤ余之ヲ聞ンヲ欲ス

千八百六十三年第六月十六日

　大学士　エス　ヒッセリング　自署

右本書ト違フナシ

　大学士　イ　ホフマン　自署

（一一七）

フィッセリングは津田と西両名が来学した志と希望とその意志に答えるためには、広義の「政治学」(Staatswetenschappen)の根本を教授することが肝要と考え、具体的には、第一に「性法之学」(法哲学)(de kennis van het Natuuregt)、第二に「万国公法之学」(国際公法)(de kennis van het Volkenregt)、第三に「国法之学」(de kennis van het Staatsregt)、第四に「制産之学」(経済学)(de kennis van de Staatshuishoudkunde)、第五に「政表之学」(統計学)(de kennis van de Statistiek)について講義することにしたい。そこで最初に五教科の講義の要点を簡明に示して、両名にその旨趣を理解してもらうことにする。しかしこの五教科を習得するためには、ほぼ二年を要するし、そもそもこれを学ぶためには、オランダ語の修得が先決である。講義は今年の十月ないし十一月から開始し、学校の休日以外は毎週二昼夜、自宅にて教えようと思う。だが、もし教えてみてこれは無駄だと判断したとき、あるいは他の理由で講義を中止したいと思ったときは、いつでもこれを中止することは自分の自由である。以上の条件を受け入れるかどうか、あるいは別の条項を加えたいか、自分に聞かせて欲しい。――おおむねこういう趣旨である。

フィッセリングが教授した学問は、必ずしも当時の欧米の最先端の学問とは言えなかったかもしれないが――「レンブラントの世紀」[27]と言われるオランダの全盛期は過ぎ去り、オランダは英、仏、独、米などに後れを取り始めていたので、蘭語はもはや欧米の最新の知識や情報を学ぶのに最適の言語ではなくなっていた――、洋書調所の精鋭二名がライデン大学のこの国民経済学・統計学教授から摂取した学問は、まさに近代日本の哲学や諸学問の基礎となるのである。黒船到来によって二六〇年の鎖国という眠りから目覚めたばかりの日本にあって、実用的技術（軍艦の操縦技術など）の修得を目的とした榎本武揚や沢太郎左衛門などに混じって、欧米の学術や制度の修得を第一義とする留学生二名が使節団の中に加わっていた意味は、きわめて大きいと言わざるを得ない。

国民的人気を博した福沢諭吉と異なって、西周の著作活動は今日のわれわれには馴染みが薄いものとなっているが、明治のその時代に遡ってみれば、西が果たした役割は福沢と肩を並べるものである。帰国後の一八六七年（慶応三年）、西が京都四条大宮西入更雀寺の私塾で講義した内容を、のちに受講生の会津藩士山本覚馬（新島襄の妻八重の兄）の筆写ノートから興した『百一新論』（明治七年三月刊行）[28]は、「人文科学（その中心としての哲学）を先頭に立てての西洋諸学問の意義と位置づけを、当時の好学の青年たちにいち早く伝えたもの[29]」として、今でもその意義を失っていない。

「明六社」といわれる結社が日本の近代化に果たした役割と、そこにおける西の働きもまた忘れることができない。

「明六社」とはすなわち、一八七三年（明治六年）欧米視察から帰国した森有礼の呼びかけによって結成された結社であって、西周、西村茂樹、福沢諭吉、津田真道、加藤弘之、箕作麟祥らがその同人となった。これはわが国最初の学術団体であり、一八七四年（明治七年）三月から機関誌『明六雑誌』を刊行して、政治・経済・宗教など様々な問題について啓蒙思想を鼓吹した。毎号三千数百部が刷られたというから、当時の雑誌としては大変な部数であったことがわかる。しかしこの雑誌は政府の言論弾圧で、一八七五年（明治八年）一一月には廃刊となり、「明六社」の活動も尻すぼみとなってしまった。「明六社」に集った上記の面々は、開成所グループと翻訳方グループの混成よりなっており、もともと思想的にも政治的にもかなりの温度差があった。それが現実の時局的問題をめぐって、やがて発展的対立を見ることになったのである。その主だった論客の思想傾向を色分けすると、最も保守的で政府寄りなのが加藤博之、最も反政府的で革新的なのが福沢諭吉と西村茂樹、そして西周はつねにその中間的立場を取っていた。

福沢諭吉と西周は生涯友好関係を保ち、このことは一八七九年（明治一二年）一月に設立された日本学士院の初代会長に福沢が選ばれ、第二代会長を西が引き継いだことにもよく示されている。しかしこの二人の間に対立・論争がなかったわけではない。われわれの関心を引くのは、「学者の職分」をめぐる両者の立場の違いである。論争を仕掛けたのは（といっても、別に西を標的にしたものではないが）福沢である。福沢は驚異的なベスト・セラーとなった『学問のすゝめ』

の第四編で、「学者の職分を論ず」という主題について舌鋒鋭い持論を展開した。

一国の独立を保つためには、政府に内的エネルギーがあり、人民にもまたそのエネルギーがあって、相刺激し合わなければならない。しかしわが国では、明治維新以来、政府は専制、人民は無気力が続いている。わが国の文明を押し進めるためには、人民の無気力を一掃しなければならないが、政府の命令や指導によっては埒があかない。ぜひとも、官に依らず民間で事を行なう必要がある、本来、その任に当たるべき人材は洋学者を措いて他にないが、これがまたまるで駄目である。彼らはおおむね官途について、私事（民間事業）に携わる者はごく僅かである。しかも官途にある者は、「ただ利これ貪るのためのみに非ず、生来の教育に先入して只管政府に眼を着し、政府に非ざれば決して事をなすべからざるものと思い、これに依頼して宿昔青雲の志を遂げんと欲するのみ」。このようにして、「世の人心益々その風に靡き、官を慕い官を頼み、官を恐れ官に諂い、毫も独立の丹心を発露する者なくして、その醜体見るに忍びざることなり。」たとえば、「新聞紙の面を見れば政府の忌諱に触るることは絶えて載せざるのみならず、官に一毫の美事あれば慢にこれを称誉してその実に過ぎ、あたかも娼妓の客に媚びるが如し」[30]。要するに、わが国は政府のみ存在していて、まだ国民は存在しないと言ってもよい。それゆえ、人民の気風を一新して文明を開化するためには、今日の洋学者のやり方に依拠してはならない。福沢は大要以上のようなきわめて急進的かつ批判的な言説を説いたのである。

これに対して、「明六社」の同人たちも口を開いて反撃せざるを得なかった。世の洋学者はおしなべて「あたかも娼妓の客に媚びる」ようなものだと貶されては、洋行帰りの旧幕臣たちも黙っておれなかったであろう。加藤は真っ先に福沢に噛みついたが、森も官の立場から柔らかな批判を加えた[31]。一方、津田は基本的に福沢の主張に賛成しながら、福沢の極端すぎる点を諫めた。それでは西は福沢の問題提起にどのような反応を示したのであろうか。

福沢の「学者の職分を論ず」に対して、西は「非学者職分論」をもって応じているが、その主張はいささか精彩を欠くと言わざるを得ない。福沢のような私塾を欲して、一時期それを試したこともあったが、西は基本的には幕府並びに

明治政府の官職について歩んできた人である。それゆえ、西が福沢と同じような私学人の立場には全面的に立てなかったとしても、それは無理からぬことであろう。西は最大限福沢の主張の真理契機を認めつつ、しかもつぎのような弁明を展開する。すなわち、政府の専制、人民の無気力という指摘はその通りだが、この事態は一朝一夕に生じたものではないので、これを改めるにはそれなりの時間と忍耐が必要である。わが国にはまだ西洋の学術の「蘊奥」（奥義）を究めた者はおらず、ようやく研究も緒に就いたところなので、あまり結果を急ぎすぎてはならない。ひとはそれぞれ長所を異にし、また志趣を異にしているのであって、それゆえ洋学者も、政府で仕事をしていようと、私立で仕事をしていようと、その持ち分が発揮できる場で活躍すればよいのではないか。「ただ余のごときは、いささか翻訳の小技をもって政府に給仕する者。もとより万一に補なきを知るゆえに、久しく先生〔福沢〕の高風を欽慕す。今いまだ、にわかに決然冠を掛る能わずといえども、早晩まさに驥尾に附かんとす」[32]。すなわち、自分は翻訳という取るに足らない仕事で政府に奉仕している者であるが、余人をもって代えがたい福沢先生の高邁な仕事ぶりを、以前から久しく尊敬している。まだすぐに官を辞することはできないが、いずれ近いうちに福沢先生の後について行きたい。これが福沢の問題提起に対する西の返答である。

ここには学問研究や思想活動をめぐる官民対立という興味深い問題が潜んでいる。われわれはまもなく、この問題が位相を変えて再び現れてくるのを見出す。それは森有礼と新島襄の教育観と大学観の相違という問題である。それはともあれ、われわれはここで、幕末から明治の三十年代にかけて、福沢諭吉と西周が啓蒙思想家として果たした役割と、彼らの思想形成にとって海外留学が有した重大な意義を、もう一度確認しておきたい。儒教的価値観のなかで自己形成し、長じて蘭学を学び、やがて英学を身につけた彼らは、実際に欧米に留学する機会をもち、自分の目で欧米の文物・制度・技術を検証し、それをわが国に紹介するとともに、それを摂取するための工夫をさまざまに講じた。彼らの欧米外遊から一世紀半が経った今でも、福沢と西は近代留学史に画然たる刻印を印している。それゆえ、近代日本の留学史

（一二一）

をこの二人から始めることはおおむね首肯されるであろう。

＊本稿は、平成二十六年度北海学園学術研究助成（共同研究）の成果の一端である。

注

1 福沢諭吉、富田正文校訂『新訂　福翁自伝』岩波文庫、二〇〇八年、一二〇―一二一頁。
2 前掲書、一三三頁。
3 前掲書、一三七頁。
4 前掲書、一三九頁。
5 前掲書、一四三頁。
6 福沢はこのように述べているが、使節団一行が迎えのイギリス艦オーディン号に乗って品川を後にしたのは、一八六一年(文久元年)一二月二二日、そのあと長崎に寄港してそこを出帆したのは、翌一八六二年（文久二年）の元旦のことであった。
7 前掲書、一五一―一五二頁。
8 前掲書、一五四頁。
9 前掲書、一五六頁。
10 前掲書、一五七頁。
11 前掲書、一五八頁。
12 前掲書、一五二頁。
13 前掲書、二三六頁。
14 石附実『近代日本の海外留学』中公文庫、一九九二年、三一頁。

15　文久二年五月一五日の西周の手書きメモ。森鷗外「西周伝」、『鷗外全集』岩波書店、第三巻、七五頁所収。『西周全集』第一巻、宗高書房、一九六〇年、八頁所収の松岡錸次郎宛ての書翰と微妙な相違がみられるが、ここでは鷗外の「西周伝」に従った。

16　西は津田真道稿本『性理論』の跋文では、フィロソフィアを「希哲学」と訳しているが（『西周全集』第一巻、宗高書房、一九六〇年、一三頁）、『百一新論』ではそれを「哲学」と称している（前掲書、二八九頁）。

17　西周「自伝草稿」、植手通有編『西周・加藤弘之』（中公バックス世界の名著34）中央公論社、一九八四年、二七一頁、および「和蘭紀行」『西周全集』第三巻、宗高書房、一九六六年、三四四頁参照。

18　西周「自伝草稿」、二七二―二七六頁、および「西家譜略（自叙伝）」『西周全集』第三巻、宗高書房、一九六六年、七四〇―七四六頁参照。

19　西周「自伝草稿」、二七九―二八〇頁、および「西家譜略（自叙伝）」、七五〇、七五三頁参照。

20　津田道治著『津田眞道』東京閑、一九四〇年、七四―九七頁、および宮永孝「オランダにおける津田真道」、大久保利謙編『津田真道――研究と伝記』みすず書房、一九九七年、一二三―一四八頁参照。

21　宮永孝、前掲書、一三四頁参照。

22　フィッセリングについては、渡邊與五郎『シモン・フィッセリング研究』文化書房博文社、一九八五年がきわめて詳細な情報を提供してくれる。

23　西周「和蘭より帰路紀行」『西周全集』第三巻、三六〇頁参照。西はこの箇所でパリで会った人物に言及し、「其次ハ森有礼君ナリ、余此時ヨリ知ヲ辱（はずかし）ウシタリ」と述べている。

24　宮永孝、前掲書、一四五頁参照。

25　この書簡の全文は板沢武雄によってオランダ語から翻訳されており、大久保利謙「津田真道の著作とその時代」、『津田真道――研究と伝記』、二六―二七頁に再録されている。

26　西周「五科学習に関するフィセリングの覚書」、『西周全集』第二巻、宗高書房、一九六二年、一四二―一四四頁。

27　ヨハン・ホイジンガ、栗原福也訳『レンブラントの世紀――十七世紀ネーデルラント文化の概観』創文社、一九六八年参照。

28　西周の『百一新論』の成立の由来と、私塾での講義を書き取った山本覚馬その人については、松本健一『山本覚馬――付・西周『百一新論』』中公文庫、二〇一三年を参照されたい。

29　清水多吉『西周――兵馬の権はいずこにありや』（ミネルヴァ日本評伝選）ミネルヴァ書房、二〇一〇年、八五頁。

30　福澤諭吉『学問のすすめ』岩波文庫、二〇〇八年、四六―四七頁。

31　森有礼「学者職分論の評」、『森有礼全集』第一巻、宜文堂書店、一九七二年、二三三―二三四頁参照。

32　西周「非学者職分論」、『西周全集』第三巻、二三九頁。